



第 117 号

北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」

2026.1.15



ポーランド名作映画ビデオ鑑賞 & 交流会 2026-1

愛に関する短いフィルム

クシシュトフ・ケシロフスキ監督

1988 | ポーランド | カラー | 86 分

1988 ポーランド映画祭 金獅子賞 主演女優賞

サン・セバスチャン国際映画祭 審査員特別賞など



2026.3/14 (土)

13:30～ 入場無料

〈第 118 回例会〉どなたもご参加歓迎 定員 40 人

札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北 8 西 3)

参加方法 (予約推奨) ☎080-4071-0956(安藤)

✉ hokkaidopolandca@gmail.com



クシシュトフ・ケシロフスキ監督 (1941-96) ウッチ国立映画大学で学び、70 年代に優れたドキュメンタリーを多数製作後、長編第一作『傷跡』(76) を発表し絶賛される。以後ポーランドの困難な社会情勢の中でも『アマチュア』(79)、『偶然』(81)、『終わりのない』(84) など秀作を発表、10 話の TV シリーズ『デカローグ』(87) は映画史に残る傑作となった。独特で詩的、神秘的な映像の『ふたりのペロニカ』(91) で多くのファンを獲得し、『トリコロール』3 部作 (93-94) は欧州の映画祭で多数受賞。次作に世界の期待が集まる中、心臓発作により 54 歳で世を去った。

本作は『デカローグ』の第 6 話「ある愛に関する物語」のロングバージョンであり、純愛が存在するかを問うた傑作である。

19 歳の郵便局員トメクは、ワルシャワの団地で友人の母と暮らしているが、孤児院で育ったため友達が少ない。トメクは隣の団地に住む年上の美しい女性マグダに強く惹かれ、望遠鏡で彼女を覗き見している。偽の通知を出して郵便局に来させたり、匿名で電話を掛けたり、牛乳配達を引き受けたりする。

牛乳を届けたトメクはマグダに愛しているからと告げてデートを頼み、彼女は応じる。デート中、トメクは彼女を 1 年間見ていたこと、彼女宛ての手紙を盗んだことを打ち明ける。マグダは驚き、「愛なんてないわ。幻想よ」と冷たく言い放つ。

マグダ「私は悪い女よ」→トメク(愛に苦しみ泣いていた姿を見ていたので)あなたはそんな人ではないという態度を示す→その夜マグダはトメクをアパートに誘い、彼の手を自分に導く(性行為に至らず)マグダは「これがいわゆる愛の正体よ」→トメクは深く傷つく→トメクを傷つけたことにマグダは

さらに深く傷つき、謝罪するが返事はない。

ロシアの文芸批評家 M.バフチンが、ドストエフスキー作品の特徴として「ポリフォニー(多声性)」と「カーニバル」、さらに「心に沁み透る言葉」と呼ぶ究極の殺し文句を挙げたことはよく知られているが、以上のストーリー進行は「ポリフォニー」や「心に沁み透る言葉」が表現されているとみることもできる。

そしてトメクは部屋で…。マグダはトメクが入院したと知らされ、後日トメクのもとを訪ねるが、友人の母は彼に近寄せようとしめない。部屋にあった望遠鏡を覗くと、マグダが見たのは…。

本作の特徴は、見られていたものが見る側に、愛されていたものが愛する側に代わるという恋愛の本質である「対話性」に迫った点にある。マグダ役のグラジナ・シャポウォフスカのドストエフスキー的演技は高度で素晴らしく、1988 年グディニヤ・ポーランド映画祭の主演女優賞にふさわしいものである。

また、『デカローグ』のうち 8 作に登場する神の使いのような人物や、ズビグニエフ・プレイスネルの音楽にも注目してほしい。(池田光良、運営委員)

[お話: 坂尻昌平氏] 映画研究者、札幌大谷大学非常勤講師。共編著『ジャック・タチ』(1999 エクスクアイアマガジンジャパン), 『ジャック・タチの映画宇宙』(2003 同), 『世界映画大事典』(2008 日本図書センター), 『淡島千景～女優というプリズム』(2009 青弓社), 『渋谷実～巨匠にして異端』(2020 水声社)